



有機化学の力で
創薬に貢献したい

立命館大学 薬学研究科
博士課程2回生
小関 大地さん

大学院では主体的に研究を進めることができます。私は、自ら立案・計画した実験が成功した時の喜びを原動力にして日々研究に没頭しています。将来は創薬のエキスパートとして、新しい視点で医薬品開発にチャレンジし、夢のある薬を創出したいです。薬学は化学や物理の知識を医療分野の発展に貢献できる魅力的な学問です。

本学の薬学研究科では、創薬に関わる広い分野でトップレベルの研究ができ、グローバルな人材を育成する環境と設備が整っていると感じています。研究を通じて共に切磋琢磨できる仲間が増えたら嬉しいです。



この場所で得た
経験やスキルは
「自分への投資」です

立命館大学 薬学研究科
博士課程3回生
川口 高德さん

博士課程後期課程では主体的にアイデアを生み出すことがより求められるので、大変な部分はありますが、将来研究者として大きなビジョンを持って研究するための力を養っている充実感があります。国内外の学会で発表させていただく機会も多く、プレゼンスキルや英語力など社会で活かせる力も身に付きました。

また、民間企業と比較してすぐに利益につながる結果だけを求められない大学だからこそ、長い目で見たときに医療ニーズに応えるような研究もできます。私は体の仕組みを解き明かすことでより多くの人を救う薬の開発につながるような研究がしたいと思っています。進学にあたって、将来や金銭面での不安はありましたが、博士課程後期課程での学びを自分への投資として活かすことが一番大事です。博士課程後期課程で学んだことは決して無駄にはならないはずですよ。

立命館大学大学院

- 理工学研究科
- 情報理工学研究科
- 生命科学研究科
- 薬学研究科
- 経済学研究科
- スポーツ健康科学研究科

〈支援制度について〉

大学院キャリアパス推進室では、教学、国際、キャリア・奨学金支援制度の有機的連携により、大学院の人材育成目的の達成およびキャリアパスの明確化に向けた支援を進めています。

博士課程後期課程の大学院生向けの研究助成制度として、国内・国際での研究活動を促進・支援（「国内研究活動促進研究費」／「国際的研究活動促進研究費」）、インターンシップ参加を促進・支援する制度（「インターンシップ奨学金」）があります。さらに、2017年度からは、英語論文による研究成果の国際的な発信を促進することを目的として、英文ジャーナル（論文誌）・国際会議などへ投稿を行う際に必要となる英語論文校正費、英語論文投稿費の一部を補助する制度（「英語論文投稿支援制度」）および海外の研究者と共同研究する際に研究費や渡航費の経済的支援をする奨学金（「国外共同研究奨学金」）を新設しました（「英語論文投稿支援制度」については博士課程前期課程の大学院生も申請可）。その他の制度についての詳細は、大学院キャリアパス推進室のHPをご確認ください。

詳細は、大学院キャリアパス推進室のHPをご確認ください。

http://www.ritsumeai.ac.jp/ru_gr/g-career/



博士課程後期課程への 進学メッセージ

Invitation Messages to Doctoral Course

【問合せの連絡先】

立命館大学 大学院キャリアパス推進室
衣笠キャンパス事務局(大学院課)

ADDRESS 〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

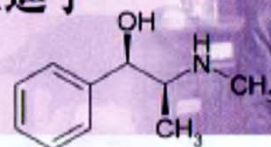
TEL 075-465-8195

Email d-cp@st.ritsumeai.ac.jp



長井記念薬学研究奨励支援事業で実現した博士課程進学

小関大地 Daichi KOSEKI (2016年度採用)
大原薬品工業(株)オーファンドラッグ研究部



私が薬学研究者を目指し、博士課程への進学を決意したきっかけは薬学部の病院実習であった。既存治療法のない難病の患者様と出会い、対症療法しか受けられずに病状が悪化していく姿を目の当たりにしたことで、「新薬の創出を通じて難病を根絶したい」という大きな目標を持つようになった。しかし当初は、学部時代に奨学金の貸与を6年間受けていた私にとって博士課程の4年間は極めて長く、金銭的にも時間的にも厳しいと考えていた。そんな時に指導教員である立命館大学薬学部の土肥寿文教授を通じて貴会の長井記念薬学研究奨励支援事業を知り、幸いにも採択していただいた。本事業のおかげで、私は日常生活に不自由を感じることなく研究活動に専念することができた。また、自身の研究成果が国際学術誌に掲載されるだけでなく、国際学会への参加や学会で優秀発表賞を受賞したことで研究者としての自信が生まれ、やりがいを感じることもできたことも本事業の支援の賜物であると考えている。

学位取得後は、製薬企業に入社し、現在は産学連携のもと難病の病態解明を目指して研究を行っている。化学系薬学を専門としていた私にとって、異分野に身を投じることに最初は不安を感じていたが、博士課程で培ってきた強みを武器に、自分にしかない視点で研究に取り組める点に研究の楽しさを感じている。今後も知識を知恵に変え、薬学研究者として成長し続けていきたいと思う。このように考えることができるのも、本事業による支援のおかげであることを改めて強調しておく。

キーワード 難病、新薬、目標、奨学金、博士課程

Copyright © 2022 The Pharmaceutical Society of Japan